唐文偵探
性
田
中

探偵文庫

怪賊團

探偵研究會編

大正
5. 2. 16
内交

特101
316

探偵飛行器に怪賊を追跡す

帝國圖書館
51.10.-8
圖書館藏書

1086057

探偵文庫

怪賊團目次

（一）銀座の大惨事……一
（二）怪しき家……一三
（三）間一髪!!……二五
（四）佐賀刑事だッ……三三
（五）秘密室の毒瓦斯……四九
（六）來たぞッ急げッ……六二
（七）轟然たる音響!……七三
（八）樵夫の深切……八六

（九）闇夜の銃聲……九九
（十）悠々とした逃走……一一三
（十一）黒煙朦々……一二四
（十二）韋駄天の如く！……一三八
（十三）飛行機より汽車へ……一五〇
（十四）逃げ行く機關車……一六二
（十五）惡漢の捕縛……一七四

探偵文庫 怪賊團

探偵研究會編

（一）銀座の大慘事

時は大正四年九月十日の眞夜中、處は帝都繁榮の中心たる銀座の東都銀行に、一大慘事が突發して滿都の人を驚かした。

東都銀行は銀座二丁目の角にある資本金二千萬圓の大銀行で、營業時間外は三名の宿直と、一名の小使と、一名の巡視が居て內外の盤視を怠らなかつた。處が十日の二時頃、締りも嚴重な此

の銀行へ、何處から忍び込んだのか洋裝をした五人の賊が這入つて、宿直の事務員三名を始め、小使や巡視迄慘殺して金庫の中から五萬圓を盜み出し、何れへか逃走したのである。

翌朝五時頃、他の一名の小使が出勤して始めて此の慘事が分ると、直に京橋の警察署へ事の次第を通報した。

通報を受けた警察署の驚きは一方でない、スワこそ一大事!!と署長は數名の刑事を從へて東都銀行へ急ぐと同時に、一方警視廳と地方裁判所へ報告した。

『何處から這入つたのだらう。』

と云ふ事が一同の問題になつたのである。其れも其の筈で、何

處を調べて見ても入口と云ふ入口は錠を下した儘で、他にも硝子一枚破けた處がなく、賊の足跡らしいものもなかつたのであつた。

『怎うも不思議だ。』

と一人の刑事が云ふと、

『實際不思議だね。』

『眞個妙ですな。』

と他の刑事も口々に怎う云つた。署長も頸を傾けて居た。

折柄報告に接して裁判所から檢事が來る。警視廳からは捜索係長や、殺人犯主任や刑事が來る。續いて頭取や、行員などがやつ

て來た。檢事や捜索係長は、殺人犯主任や刑事を指揮して早速調査を開始した。其の結果兇器は鋭利な短刀だと云ふ事は分つたが、賊は一人であるか又は數人なのか、そして何處から這入つて何處から逃げ出したのか、其れは矢張不明であつた。

『不思議な事件があるものだね。』

捜索係長は眉根を寄せて、獨言の如に恁う云つたが、更に頭取に向つて、

『此銀行の宿直人員は幾人です？。』

と尋ねた。

頭取は、

『事務員が三名、小使が一名、巡視が一名、都合五人です。』

『五人……？。』

『左様です。』

『被害者は四人です。最う一人は何と云ふ男ですか。』

頭取は一應死骸を見て居たが、

『アッ飯島が居ない。』

と叫んだ。

此の時奥の一室から飛ぶ如に此處へ來て、

『署長！。』

と呼んだのは京橋署の佐賀刑事である。佐賀刑事は若年で、未

だ新參ではあるが、職務に熱精でそして敏捷だ。だから將來有望な刑事として上官に認められて居る。

『何等手掛りのない此の大事件を、怎う云ふ方法にして搜索したら宜からうと頭を惱ませて居た署長は、佐賀刑事に呼ばれて、

『何です。』

と振り向いた。

『金庫室にも、一個の慘殺死躰が横たはつて居ります。』

『金庫室に……？。』

署長ぱ思はず立上つた。

『金庫室は何處にあるかね。』

搜索係長は怎う尋ねた。事務室に備付けてある二個の大きな金庫の外に、未だ金庫室があると云ふ事は、一同の人も迂濶して氣が付かなかつた。

『地下室にあります、只今私が御案内致します。』

佐賀刑事は怎う答へて、今度は銀行員に、

『其處に金庫係の方はお見えになりませんか。』

と尋ねた。

『ハ、私です。』

頭髪を分けた丈の高い、瘦ぎすの背廣を着けた四十歳位な男が、佐賀刑事の傍へやつて來た。

『貴下ですか。』

『ハ。』

『金庫を鳥渡開けて頂き度いですがね。』

『承知しました、御一緒に參りませう。』

一同は佐賀刑事と金庫係の案内で、ぞろ〳〵地下の金庫室へ來て見ると、成程死躰がある。

『ヤ、飯島だ。殺られたな可哀相に……。』

頭取は恁う云つた。

金庫係は直に金庫を開けやうとすると、

『鳥渡待つて下さい。』

と佐賀刑事は止めて、

『此の金庫に婦人が手を付ける如な事がありますか。』

と聞いた。

『そんな事はありません。第一此の銀行に、女は一人も居ないのです。』

と云つたのは金庫係である。

佐賀刑事は署長に向つて、

『署長！不思議な事があります。』

『甚麽事ですか。』

『此處を御覽下さい。』

と佐賀刑事は金庫の扉の合目を示して、

『此處に婦人の頭髪が三本挾まれて居ります、私の考へでは、此の賊は男女共謀でありまして、男が金庫の扉を開くと女が中から金を取り出し、急いで扉を締めた時に、女の頭髪が此處へ挾まれて拔けたのであらうと思ひます。』

一同も佐賀刑事の說に、反對する譯には行かなかつた。其處で早速金庫を開いて、中を取調べて見ると、外部から見た處では何の異狀もない如だが、內部は或る科學の作用によつて、錠前はめちや〳〵にされ、五萬圓と云ふ金を盜み取られて居たのである。

頭取はたゞさへ蒼い顏を一層蒼くした。

搜索係長以下一同は、一先づ警視廳へ引上げて搜索方針に付いて協議をした。そして一同の意見を求めたのである。

すると、犯罪者は男女二人だと佐賀刑事の前說を襲用する者もあれば、三人だ、いや十人位だなど〻云ふ者もあつて、其の理由はと尋ねると、一人や二人であんな大慘劇が演じられる者でないと云ふだけの事であつた。

やり口が極めて巧妙で、內部の樣子を能く知つて居るやうであるから、行員の內に犯罪者があるのではないか、と云ふ者もあつた。

『君の考は怎うかね。』

索捜係長は佐賀刑事に恁う尋ねた。

『ハイ、老練な先輩諸君の前で斯様な事を申しますのは、甚だ出過ぎたやうですが、今回の事件を私に御一任下さる譯には參りませんでせうか。』

是れを聞いた他の刑事は、何れも生意氣なと云ふ如な顔付をした。

捜索係長も佐賀刑事の實力を知つて居るのであるから、莞爾して、

『君がさう云ふからには、期待する事があるのだね。』

『無論です、充分期待する處があつて申し上げたのです、私は一

身を犧牲にしても本事件の解決を致します。』

佐賀刑事の顔には熱誠の色が表はれた。

『宜しい、君に一任するッ。』

捜索係長の聲は凛として居た。

(二) 怪しき家

強盗殺人事件としては空前絶後と思はれる今度の大事件を一身に引き受けた佐賀刑事は、責任の大なるだけ、それだけ期待する事も多かつた。

佐賀刑事は此の事件の犯人は多少銀行に關係のある者と見込み

を付けて、同銀行の預金者全部を探偵して見る事にした。

預金者の中に梶原剛藏と云ふのがある。家は麴町區八重洲町だと云ふので、來て見ると實に壯麗な住宅である。附近で聞いて見ると一年程以前に此處へ移轉して來たので、相場師だと云ふ事であるが、主人らしい四十歳位の立派な紳士と、其の奥さんらしい三十歳位の婦人とは毎日自働車に乘つて何處へか出掛けるが、時によると夜中の二時三時頃に歸宅る事もあるとの話であつた。

佐賀刑事は早くも此の家に注目して、早速紙屑買となつて探偵に從事した。

少い日は五六回、多い日には七八回毎日屑籠を肩にして此の附

近を、

『屑い、屑い。』

と呼び歩いて居るのは佐賀刑事である。

一週間程熱心に歩いて見たが梶原の家から呼び聲が掛らない。

流石の佐賀刑事も閉口して、或る日梶原の勝手口から中の樣子を窺ひながら、

『お宅樣には空瓶、新聞のお拂ひは御座いませんか。』

女中らしい聲で、

『ありませんね。』

『空罐、襤褸、何か御座いませんか。』

恁う云ひながらも、家内に注意を怠らなかつた。

『ありませんよ。』

勝手口からそッと中を覗いて見ると、家の割合に勝手道具が少ない如に思はれた。

家内は何となく陰氣臭くつて、女中の外には人の居る氣配もしなかつた。佐賀刑事は張合抜をして其處を去つたのである。

其の夜未だ宵の事だ。日本橋の榮盛銀行に又も强盗殺人事件が起つて、行員一名と小使二名を慘殺し、行金一萬五千圓を奪つて逃走した。其のやり口が全然東都銀行と同一であるから同じ犯人に相違ない。

東都銀行事件を一身に引き受けて既に十日にもなるか、未だ探偵の糸口さへ付かぬ内に同一事件が起つたのであるから、佐賀刑事は氣が氣でなかつた。

梶原と云ふのが本件に關係がない迄も、必ず何等かの秘密があるに違ひない。

『よしッ。』

とばかり佐賀刑事は、一層探偵の歩を進めた。

晝となく夜となく梶原の家に注意を拂つて居た佐賀刑事は、或る朝其の玄關に自働車が横付けに爲つて居るのを認めたので、少時様子を見て居ると、洋裝の一紳士が一人の美人と共に、書生と

女中に玄關迄送られて自働車に乘つた。

自働車は吳服橋方面に向つて疾風の如く走せ進んだ。いでや其の行く先きを突き止めてやらうと、佐賀刑事は自轉車にヒラリ身を乘せると、自働車を追跡した。

間もなく自働車は東京停車場に着いた。紳士は婦人と共に一等待合室へ這入ると、運轉士は出札口へ急いだのである。佐賀刑事も早速出札口へ行つて、何處迄の切符を買ふのだらうと注意して見て居た。運轉士の買つた切符は程ケ谷迄であつた。其れを買ひ求めると運轉士は待合室へ這入つて紳士に渡したのである。

是れを見た佐賀刑事は停車場の事務室を借りて立派な紳士に變裝

して了つた。軈て紳士と婦人は悠々として汽車に乘り込んだので佐賀刑事も夫れに續いたのであつた。

汽車が程ケ谷へ着くと紳士と歸人はまた悠々と改札口を出た。停車場の前には一臺の自働車が待つて居る。紳士は其の運轉士と一言二言何事が問答をしながら乘り込むと自働車は動き出した。

此の間に佐賀刑事は早くも以前の姿に變裝すると、再び自轉車を飛ばして彼等の後を追跡した。

紳士と婦人は、とある門前で自働車を乘り捨て西洋造りの立派な一軒建の入口を這入つて行つた。

此處は淋しい森の端の一軒家で周圍に人家もなく、森閑として

物音一つしないのである。佐賀刑事は暫く周圍の様子に目を配つて居たが、大丈夫と見て取つて足音を偸みながら今兩人が這入つた此の怪しい家内へ只一人忍び込んだ。

佐賀刑事は窓を締切つた暗い廊下を忍び込むと軈て明るい一室へ出た。暫く立止まつて耳を傾けて居ると、何處からとなくひそひそ話聲が聞える。ゴム靴の音を忍ばせて前の扉の鍵穴から中を覗き込むと驚いた。室内には先刻の紳士、婦人を始め六七人の大の男が車座になつて密談の最中である。

『今日乃公が來たのは外ぢやない、二個所共旨く行つたから此の次の仕事の相談をして置きたいのだ。』

と云つたのは紳士である。

『次の仕事と云ひますと、親分甚麽仕事なんです。』

『親分は止して呉れ、夫れは昔の泥棒の事だ、先生と云つて貰ひたいね。』

『おつとさうだつけ、泥棒の先生なんだから恐れる。』

と云つたのは一の子分とも云ひさうな面構への男であつた。

『何時も強盗や人殺しぢや面白くねえから、今度は一番華族の令嬢でも盗み出して驚かせてやらうと思んだが怎うだ。』

『そいつァ面白え。』

『早速やりませう。』

『お下りは項戴が出來ますかい。』

と二三人が口を出す、

『お止しなさいよ、罪でさァね。』

と此時例の婦人が口を開いた。

『女の事となると直に手前は顏色を變やがる、惡黨の女房らしくもねえ。』

紳士風をした首魁が恁う云つた。

最前から此の樣子を覗いて居た佐賀刑事は直に踏み込んで逮捕してやらうと思つたが、何しろ多勢に無勢である。殊に兇漢の事であるから、甚麽手管が出來て居るか分らないと思案をして居る

折柄、後の方の壁と思はれた處が不思議にも音もしないでスーッと開いて、首魁の姿が現はれた。

佐賀刑事は少しも氣が付かなかつた。首魁は傍に在つた電鈕を一二度押したかと思ふと、佐賀刑事の立つて居る床の板は外れて急轉直下、刑事は數十丈の奈落の底へ、ズデンドーンと落されて

『ウーン。』

とばかり絶息したのである。

一間からは一同がドヤ〳〵現はれて、

『先生、旨く行きましたな。』

『最う是れで大丈夫です。』

首魁は莞爾して、

『飛んで火に入る夏の虫だ。馬鹿ッ。』

と云つたが一同に向つて、

『上げて來いッ。』

と命じた。

『ハッ。』

と一同は此場を去つたが、間もなく手取り足取りして絶息した佐賀刑事を運んで來た。首魁は一人の部下に向つて、

『夜になつたら此の死骸を、海の中へ投げ込んで來い。』

と云ひ付けた。

『水葬にするんですか、承知しました。』

(三) 間一髪!!

踏んでも叩いても正體の無い死體の如な佐賀刑事を擔いで、兇漢の一人は自働車に乘り移ると、夜の闇を幸ひに海岸へ走らせた。

自働車が海岸へ着くと、兇漢は刑事の體を背にして岩角へ下した。周圍は波の音を聞くばかり暗々として物凄い、今や兇漢の爲めに海中へ蹴落されやうとした間一髪! 兇漢の足が遲かつたのか刑事の手が早かつたのか、死んだと思つた佐賀刑事は、ット飛び起きたかと思ふと、

『えゝッ。』

と眞の宛身で兇漢を倒した。脾腹を突かれて兇漢は、

『ウーム。』

と絶息した。

大膽な佐賀刑事は絶息したのでは無かつた。絶息と見せたのは彼の計略なのであつた。

『貴様などの手に懸つて死ぬやうな、佐賀刑事ぢやない。』

と莞爾した。

軈て佐賀刑事は自分の懐中から紙入を取り出し、絶息して居る兇漢の懐中へ捻込んだ。

『恁うして置けば乃公を投げ込んで其の後で何者にか殺されたと思ふだらう、乃公は死んだ事にして奴等の裏を書いてやらう……。』

と傍の自働車へ乗ると、何れともなく立ち去つた。

首魁外一同は幾ら待つても例の兇漢が歸つて來ない、怎うした事であらうと海岸を尋ねて見ると兇漢の死骸を發見したので、早速秘密の西洋室へ引揚げた。

『先生、歸らない筈でさア、殺られて居ましたよ。』

ぢやア佐賀刑事は逃げたのか。』

首魁は眉を顰めて恁う言つた。

『否、御安心なさい、刑事の紙入が隱衣に入れてありますから、刑事は旨く殺つ付けたんですよ。』

『夫れにしても怎うして死んだのだらう……？。』

『誰かに殺られたんでせう。』

兇漢の死因は疑問であつたが、佐賀刑事が殺したとは誰しも思はなかつたのである。

佐賀刑事の慘死が新聞に記載されると、噂は忽ち東京全市……否日本全國に漲り渡つて、人の口の端に喧傳された。

銀座のカフエーライオンの卓を圍んだ四人の紳士も、頻りに此の噂をして居た。

『佐賀刑事が毒手に倒れたさうだね。』

『評判の名刑事があれぢや、吾々は暢氣にして居られないね。』

『君等は大丈夫だよ。』

と一人が笑ひながら云ふと、

『何故、何故？。』

『第一君等は奪られるものが無いぢやないか。』

『さう云へばさうだね。』

『はゝはゝゝゝ。』

四人は聲を揃へて笑つた。其の笑ひ方が大袈裟であつたので周邊の人の視線は一樣に四人に集つたのである。四人も今更極りが

惡くコッソリして了つたので、何事が起つたかと注目した周邊の人も再び酒杯に歸つた。そして何處の隅でも話は佐賀刑事の慘死で持切つて居た。

例の四人連れは、

『怎うだい、最う出掛けやうか。』

『未だ早いよ。』

一人の紳士は懷中時計を出して見せた。金色の光輝がキラリと酒場の電氣に輝いた。

其の時此の卓の後方に只一人、ビールを飲んで居た男の鋭い目が四人を睨めた。

四人の紳士は、そんな事に少しも心付かなかつた。

『早く行つて可い場所を取らうぢやないか。』

『否、君は美津江嬢の眼に觸れさうな場所を選みたいのだらう。』

『嘘を云ふな。』

周圍の人に心を兼ねて恁う云つたが、さうだと云ひ度い如な氣分は充分其の顏に現はれた。

『では出掛けるとするかね。』

四人は勘定を濟ますと立上つた。そして此處を出ると東京劇場の入口を這入つた。最前の怪しい目付の男も四人に續いて同劇場へ這入つたが、紳士の氣付かぬやうに後部の椅子に腰を下した。

東京劇場は今日が三日目で、女優美津江の人氣は非常なものであつた。見物は立錐の地なき程詰め掛けて居る。軈て第一鈴と共に奏樂が始まり續いて幕が開いた。

舞臺は王宮の廣庭で、正面には美しい建物があつて周圍には種種の花が綺麗に咲いて居る。此處へ侍女に手を引かれて出て來たのは美津江の扮した姫君である。

見物の目は一齊に美津江に集つた。姫君は身に薄衣を着て、髪に美しい花飾を着けて居る。腕の寶石が場内の電燈に映じてキラキラと光る。頸を動すたびに其の頸飾もキラキラと輝いた。

『彼の頸飾が一個幾萬圓と云ふのださうだから驚くね。』

『實に大したものだよ。』

『此の座の女優は、夫れ〳〵寶石を持つて居るので評判だ。』

と紳士は囁いた。

舞臺の下手から一人の少壯士官が登場した。姫君と士官は甘き戀を物語り、接吻したり抱き合つたりした。紳士は夢中になつて見惚れて居たが、例の怪しい男の目は、舞臺よりも四人の紳士に注がれて居た。

軈て喝采の内に幕は閉ぢられた。見物は廊下へ流れ出して、喫茶店やカフエーを賑はした。

* * * * *

美津江は今序幕を終へて、浴室から白い浴着になつて化粧室へ這入つた。

折柄給仕が花束と名刺を持つて來た。

『是れを美津江さんに渡して下さい。』

『承知しました。』

弟子は夫れを受け取つて美津江の部屋へ持つて來た。美津江は化粧を終へて部屋の鏡の前に坐つて居た。

『お師匠さん此のお方が……。』

と弟子が花束と名刺を差出すのを鳥渡見て、

『此處へ何卒。』

『お通しゝませうか。』

『あゝ。』

美津江は頷いた。弟子は給仕に通して宜いと傳へた。

軈て給仕に導かれて一人の紳士が這入つて來た。夫れは先程カフエーライオンに居た四人連れの一人である。

紳士は頻りに美津江の天才を賞贊して居ると、舞臺では第一鈴が鳴つた。弟子は出幕になつて居たので急いで大部屋へ出て行つたのである。

紳士は弟子の出で行くのを見送ると、美津江の傍へ身を寄せて突然美津江の手を握つた。

『貴郎、御冗談を爲すつちや不可ません。』

此の時紳士は隱衣から手巾を取り出して、美津江の口を押へた。

『ウーム。』

美津江は呻きながら其の場へ倒れたのであつた。

(四) 佐賀刑事だッ

美津江が倒れて生體のないのを見ると、紳士は輕く呼子を吹いた。

『先生。』

突然窓の外から人の顔が現はれた。

『這入れ。』

と紳士が云ふと、男は窓から飛び込んで、

『旨く行きましたな。』

と莞爾した。此の男は矢張先刻の四人連れの一人で、何時の間にか服裝も變つて居た。

先生と云はれた紳士は、

『衣裳箱を……。』

云はれて男は化粧室から衣裳箱を持ち出して、中の物品を全部取出し、代りに女優を其の中に入れた。

兩人は箱に細引きを結び付けて、窓の外へスル〳〵と下した。

『おい、大丈夫か。』

紳士と男は窓から半身を出して、下の闇を見下して恁う云つた

窓の外は劇場の裏手で、窓下には二人の男が待ち構へて居て、箱が地に着くと、

『宜し。』

と合圖をした。

『着きましたよ、先生。』

『さうか。』

『私は一足先へ失禮します。』

『それでは、いつもの處で待つて、呉れ。』

『ハイ承知しました。』

男は再び窓の外へ姿を消した。紳士は大膽にも廊下へ出で、カフエーへ這入つてビールを飲み、軈て木戸口を出て行つた。

舞臺は第三幕が開く可く鈴が鳴つたが、四人の紳士の席には最う其の姿が見えなかつた。怪しい男も居なかつた。

東京劇場の樂屋は上を下への大騒動になつた。美津江の姿が見えない爲めに、芝居も一時中止せねばならぬ事になつたのである。

劇場の樂屋では大騒ぎをやつて居る中に、美津江は衣裳箱に入れられた儘代々木の或る一軒の家へ自働車で送られた。

三人は衣裳箱を奥まつた一室に運んで、

『怎うだい、旨く行つたぢやないか。』

『豫想以上だつたね。』

などゝ話して居る處へ、悠然と這入つて來たのは首魁の紳士である。

『皆な御苦勞だつたな。』

『怎う致しまして……併し旨く行きましたな。』

『うむ。』

『此の箱は怎うしませう。』

『いつもの室へ運んで呉れ。』

『承知しました。』

首魁が、傍の電鈕を押すと、正面の壁が一間程例の通り音もなく下つて、其處は階段になつて居る。三人は衣裳箱を擔いで其の階段を下りると軈て廣い一室に來た。首魁も後からやつて來て、

『いや御苦勞々々、此處には最う用がないから皆なは彼方で一杯飲つて呉れ。』

『ハイ。』

三人の去つた後で首魁は靜に箱の蓋を開けた。此の時美津江は始めて我に歸ると思はず、

『アレッ。』

と叫んだ。

首魁は凄い顔に微笑を漏らして、

『靜にするが可い、幾ら騷いだつて駄目だから……。』

美津江は首魁の顔を見て、

『貴郎は誰方なんです、』

『乃公は梶原剛藏と云ふ者だ。』

『そして此處は何處なので御座います。』

と美津江は周圍を見廻した。

『此處は代々木の或る家だよ。』

『代々木……私怎うして怎麽處へ來たのでせう。』

『乃公が連れて來たのだ。』

『何だつて私を、怎麽處へ連れて來たのです。』

『少し貴女に用事があつたからさ。』

『私に用事？、どんな用事です、早く云つて下さい、そして私を歸して下さい、私は芝居の事が氣になつてしやうがないのですから……。』

『今話すよ、さう急がんでも宜しい、實はな貴女の所有て居る寶石を貰ひたいのだ。』

『エ、ッ。』

美津江は倒れんばかりに驚いた。

『夫ればかりぢやない、貴女は乃公の自由になつて貰ひたいのだ。』

『そ、そんな事は私……。』

『嫌だと云ふのか。』

『嫌です、嫌です、死んでも嫌です。』

『何ッ、死んでも嫌だッ。』

『貴い私の肉體は、貴郎の自由にはさせません。』

『生意氣なッ、飽迄嫌だと云へば是れだぞッ。』

剛藏は短銃を美津江の前に突付けた。

『アレーッ。』

美津江は一時驚いたが、最早逃れぬ處と覺悟を定めて、

『嫌です、私は怎うしても嫌です。さア一思ひに殺して下さい。』

と決心の色を見せた。

剛藏も元より殺す積りはないのであるから、美津江の手強いのに閉口して、

『何もさうむきにならんでも宜しい、まア能く考へて置くさ。乃公はまた後に來るから。』

怎う云つて剛藏は入口の扉に錠を下して出て行つた。

美津江は其の場にワッと泣き臥した。

折柄靜かに扉の錠を外して、ソッと這入つて來た者がある。

美津江はハッとした。

『君靜かにし給へ、僕は京橋署の刑事です。』

夫れは佐賀刑事であつた。美津江は地獄で佛に會つた如き氣がした。

『さ早く僕の肩に……。』

佐賀刑事は美津江を背にして廊下へ出ると、裏口の方へ向つた。廊下の突當りに一個の扉があつて堅く錠が下してある。合鍵を捻ると扉は樂に開いた。

『旨いッ。』

刑事は恁う云つて一足出す途端！

『うぬッ。』

と外から力任せに刑事を突いた者がある。不意であるから、

『しまつたッ。』

と云ひながら背中の重みに、撞と後に倒れた。夫れと見た兇漢は、

『此の野郎、太い畜生だッ。』

矢庭に二三人が飛び掛つて刑事を高手小手に縛めたのである。

刑事は

『殘念だッ。』

と叫んだが最う仕樣がない、折角連れ出した美津江は再び兇漢

の手に奪はれ、何れにか運ばれて了つた。

佐賀刑事は以前美津江の入れられた秘密の一室へ監禁された。

處へ剛藏が這入つて來た。

『貴樣何と云ふ名か。』

佐賀刑事は目を光らせて、

『乃公は貴樣等に名を名乘る必要がないッ。』

刑事は變裝をして居た爲め、剛藏は此の前程ケ谷の巢窟で陷穽に掛けた刑事とは思はなかつた。

『何ッ、名乘らねえ、生意氣な奴だ。オイ高山、懷中を調べて見ろ。』

『ハッ。』

高山と呼ばれた兇漢が刑事の懷中を探ると手帳が出た。

『先生恁麼ものがありますよ。』

と高山は其の手帳を剛藏に渡した。

剛藏は手帳を開いて一目見ると、サッと顏色が變つた。

『オイ、此奴が佐賀刑事だッ。』

『エッ。』

と他の兇漢も驚いた。

(五) 秘密室の毒瓦斯

彼等兇漢が最も恐れて居たのは佐賀刑事である。其の刑事を此の前程ケ谷で殺したので安心して居る處へ、死んだと思つた佐賀刑事が再び現はれたので彼等の驚いたのも無理はない。

『ぢや未だ生きて居やがつたのか。此の梶原剛藏はな、貴樣の如き青二才に逮捕る程未だ耄碌はしねえのだ。』

憤怒と口惜しさとで、刑事の眉は電の如に動いた。

『口惜しいか、樣を見ろ、はゝはゝはゝ。』

恁う云つて剛藏が笑ふと、他の一同も聲を揃へて笑つたのである。

『先生！獨逸の戰略ぢやねえが、此奴を毒瓦斯責にしたら怎うです。』

と高山が云つた。

『夫れが宜からう。』

と剛藏は頷いた。

『面白い〳〵、夫れが宜い。』

と他の兇漢も賛成した。

剛藏が高山に鳥渡目配せをすると、

『ハ、承知しました。』

と云つて高山は出て行つた。

間もなく室の一隅から異樣な臭氣がして、煙の如なものが這入

つて來た。

『此處で貴樣は往生するのだ。』

恁う云つて剛藏は、他の兇漢を伴れて此の室を出ると、外からピンと錠を下して、足音は段々遠くなつて了つた。

煙は追々室に滿ちて來る。呼吸は窒りさうだ。

『兇漢を捕縛する事も出來ず、却つて彼等の毒手に掛つて此處で死ぬのかッ。死ぬのは厭はぬ決して厭はぬ。只彼等を捕縛しないのが殘念だッ。』

と佐賀刑事は口惜がつた。

五分！四分!!三分!!!刑事の一命は刻々に迫つて來た。

他の一室には剛藏を始め部下の三名が居並んで、酒を飲みながら頻りに美津江を責めて居た。

一同は最うかなり醉つてるらしい、部下の一人はコクリ〳〵と居眠りをして居る。

『剛情も大概にして、うんと云つたら怎うだ。』

と云つたのは剛藏である。

『私は怎うあつても嫌です。』

『柔しくすれば可い氣になつて、一躰貴樣は乃公を普通の人間だと思つて居るのか。』

『普通の人間だとは思つて居りません。』

『ぢや何だと思ふ。』

『女を誘拐する惡い人だと思つてます。』

と美津江はキッパリ云つた。

『女を拐帶すのは乃公の内職だ。乃公は電團の團長で本業は强盗なんだ。』

『エッ。』

と美津江は驚いた。

『東都銀行や榮盛銀行の事件は此の乃公がしたのだ。』

『ぢや貴郎が……。』

美津江はブル〳〵と身を震はせた。

『さうだ。貴樣がたつて嫌だと云ふなら、暴力に訴へても自由にするのだ。』

美津江は何と思つたか、急に笑顔を見せて、

『貴郎が夫れ程の覺悟をして入らつしやるなら、私が幾ら嫌だと云つた處で、怎うする事も出來ません。』

『夫れぢや從ふと云ふのか。』

『えゝ、其の代り私は再び世の中へ出やうとは思ひません、怎うか一生、貴郎の傍に置いて下さい。』

と剛藏の膝に萎垂れかゝつた。

剛藏はさも滿足氣に、

『屹度夫れに違ひないか。』

『えゝ。』

『乃公を欺さうなどゝ思ふと、とんだ間違ひだぞ。』

『私は一度決心した以上は貴郎を欺すやうな事は致しません。』

『ぢや其の腕を出せ。』

『腕を怎うするのですか？』

『文身をするのだ。』

『エッ。』

美津江は驚かずには居られなかつた。

『貴様も乃公の云ふ事を聞く上は、團員になるのだ。乃公の團員

は誰でも右の腕にハートの文身をする事になつて居るのだ。』

美津江は怎うかして、其の文身を免れやうと思つた。

『夫れは只今でなくても宜しいぢやありませんか、夫れより私お酌をしませう。』

流石の悪漢剛藏も、女には目がなかつた。

『ぢや文身は翌日する事にして、酌をして貰ふかな。』

と剛藏は杯を出した。

『怎麼小さいのでなく、其方のコップで召し飲れな。』

と美津江はコップへ酒を注いだ。

『他の者にも酌をして遣れ。オイ貴様等は東京劇場の女優に酌を

して貰ふのは今夜が始めてだらう、有り難く頂くんだぞ。』

『ハイ。』

と云つて部下の三人も喜んだ。

美津江は盛に四人の酌をした。剛藏以下三人の兇漢も氣が緩んだと見えて、段々に酔が廻り生躰なく眠つて了つた。

『皆さんお弱いのね、最う飲らないんですか。』

恁う云つたが、四人は鼾の外返事がなかつた。

美津江は窃と剛藏の傍へ寄つた。そして其の隱衣から一括りになつて居る澤山の鍵を取り出すと、秘密の一室へ急いだ。

扉を開けると朦々たる煙は惡臭と共に美津江を襲つた。併し夫

れに恐れて居る場合でない、美津江は室内に飛び込んで、倒れて居る佐賀刑事の耳に口を寄せた。

『貴郎ッ、早く私と一緒に逃げて下さいッ。』

呼んだ聲は低かつたが、刑事はハッと兩眼を開いて、

『オ、美津江さん？。』

『さア、早く、貴郎ッ。』

兩人は漸く家外へ出た。外氣に觸れると刑事の氣分は幾分恢復した。

折柄此處へ一臺の自働車が來た。止めて見ると一人の老紳士が乘つて居た。佐賀刑事が事情を話すと心能く承知して呉れたので

刑事と美津江は夫れに同乘して、手近な警察署迄やつて貰ふ事にした。

『宜し、出せッ。』

老紳士が怎う云ふと、自働車は驀地に走せ去つた。

此の時剛藏は眠りから覺めた。

『オイ、可怪な臭ひがするぞ。』

云ひながら傍を見ると、美津江が居ない。

『オイ、起ろ〳〵ッ、何だつて眠て了ふんだッ。』

ハッとして部下の三人が眠から覺めると、

『早く地下室を調べろッ。』

三人は秘密の室へ來て見ると、扉は開け放しになつて、刑事の姿は見えなかつた。

『居ないぞッ。』

『逃げたかッ。』

『大變ッ。』

一人は早くも此の事を剛藏に知らせた。

『先生ッ、大變です、大變です。佐賀刑事が逃げましたッ。』

『逃げたかッ、早く自働車の仕度をしろッ。』

『跡を追ふのですか。』

『今更追跡したつて仕方がない。屹度今に警官が逮捕に來るだら

うから、我々も逃げるんだ。』

軈て一人が自働車を裏口へ廻すと、一同は夫れに乗つて、剛藏は、

『停車場へッ。』と叫んだ。

(六) 來たぞッ急げッ

此の時警察の自働車は、佐賀刑事外四人の警官を乗せて全速力で來て見ると、兇漢は今しも自働車に乗つて逃走する處である。

『追跡ッ。』

佐賀刑事は恁う叫んだ。

運轉手は方向を變へて兇漢の自働車を追跡した。

『來たぞッ、急げッ。』

剛藏は短銃を手にして恁う云つた。

兇漢は一生懸命である。警官も一生懸命である。

自働車と自働車の間は、段々接近して來た。

折も折、警官の乗つた自働車はパッタリ止まつた。故障が出來たのである。

運轉手はヒラリと飛び下りて器械の檢査を始めた。

『怎うした。』

『仕樣がないな。』

警官は氣が氣でない。

『迚も直と云ふ譯には參りません。』

運轉士は恁う云つた。

佐賀刑事はヒラリと自働車を下りたが、兇漢の自働車を目掛けて一散に驅け出した。

夜は今全く明け離れた。曇つた空は今にも雨になりさうである時しも向ふから小僧らしいのが自轉車でやつて來た。佐賀刑事は否應なしに其の自轉車を借りて兇賊を追跡した。

小僧は呆氣に取られて刑事の跡を見送つて居た。

兇漢は新宿の停車場へ着くと、剛藏以下二人は直に汽車に乘つ

た。殘る一人は自働車と共に何れへか姿を隱したのである。

佐賀刑事は停車場へ着いて、橋の半迄來ると、汽車は最う動き出した。橋を渡つて居たのでは間に合はぬと見た刑事は、橋の中央から今進行を始めた汽車の屋根に飛び乘つた。

兇漢の三人は窓から窃と顏を出した。

『可い鹽梅でしたな。』と云つたのは高山である。

剛藏は、

『うむ。』と頷いた。

『今來たつて最う間に合はないから、安心ですよ。』

他の一人は云ふ。

『兎に角變裝をしやうぢやないか。』と剛藏が云ふと、

『夫れが可いです。』と三人は變裝に取り掛つた。

軈て剛藏は老紳士に化けた。高山は若い紳士になつた。他の一人は其の隨行と云つた風に化けたのである。

剛藏は、

『怎うだい、是れなら誰にも分るまい。』と莞爾した。

汽車は今國分寺へ着いた。すると窓の外から覗いた者がある。剛藏はハッとして窓から鳥渡頸を出して見たが、其處には誰も居なかつた。

『オイ、氣を付けろ。』と剛藏は高山に云つた。

『怎うしました。』と高山は怪現な顏をした。

『怪しい奴が居る。』

『さうですか。』

汽車は又進行を始めた。

『事によると佐賀ぢやないか。』

『彼奴、此の汽車に乘つてるんでせうか。』

『さうかも知れない、却々機敏な奴だからな。』

三人は注意を怠らなかつた。

汽車は最う山梨縣の地籍を走つて居る。程なく笛吹川の鐵橋に差し掛らうとする時、一人の車掌が三人の前に立つた。

『切符を拜見致します。』

剛藏は切符を示しながら、チッと車掌の顔を見て居たが、車掌が三人の切符を調べ終つて、

『御手數でした。』

と行き過ぎやうとした時、剛藏は二人に目配をしたかと思ふと突然車掌に宛身を吳れた。

不意であるから車掌は、

『ウーム。』と云つて其の場へ倒れた。

『先生怎うしたのです。』

二人は不思議に思つて、怎う尋ねた。

『貴樣等にや分らんか。』

剛藏は微笑しながら云つた。

『分りませんよ。』

『一躰怎うしたんです。』

二人は更に怎う云つた。

『帽子を脫つて見ろ。』

剛藏に怎う云はれて、高山は車掌の帽子を脫つて、

『是れが怎うしたんです。』と聞いた。

『馬鹿ッ。』と剛藏は叫んで、

『其奴の頭は鬘だ。』

『エッ。』と云ひながら、毛髪を強く引つ張ると、ヅル〳〵と抜けて來た。成程鬘である。

其の顏を見て、

『ヤッ、探偵だッ。』と兩人は驚いた。

是れは佐賀刑事であつたのだ。刑事は此の汽車に飛び乘ると、直に車掌に變裝して三人の樣子を見て居たが、彼等の行く先きを知る必要があつたので切符を取調べ、不幸にも剛藏の爲めに發見されたのであつた。

『先生、怎うも恐れ入りました。』

『貴樣等の眼は節穴同然だ。』

『實際ですよ。』

高山は感心した如に云ふ。

『何も感心しなくても宜い。』と剛藏は笑つた。

『して此奴は怎うしませう……？。』

『最う直ぐ笛吹川だ、鐵橋へ掛つたら川の中へ投げ込んで了へ。』

『承知しました。』

間もなく汽車が鐵橋の半まで來ると、高山は他の惡漢の手を借りて、佐賀刑事を汽車の窓から笛吹川へ投げ込んだ。

『樣を見ろッ。』と高山は毒付いた。

汽車は怎麼椿事があるとも知らず、轟々と橋を渡つて行く、

佐賀刑事は河中へ投げ込まれて始めて我に返つた。

『やられたかッ。』と心に叫んで、直ちに岸に泳ぎ付けた。彼方を見れば汽車は黒煙を吐いて長蛇に似た體を走らせて居る。

『何うかして彼の汽車に、追ひ付く工風はないか。』

と刑事は怨めしさうに汽車を眺めた。

折柄一頭の駿馬に乘つて、此處を通り掛つた男がある。刑事は其の男を呼び止めると、

『何ですか。』

男は不思議さうな顔付で、馬上から恁う云つた。佐賀刑事は簡單に事情を話して馬を貸して呉れと頼んだ。

『お上の御用ならお使ひなさい。』

男は快く承知して呉れた。

刑事はヒラリと馬に乘ると、一鞭當てゝ一散に、汽車の後を追ひ掛けた。汽車は甲府で十五分間の停車がある。夫れ迄に追ひ付きたいものと一生懸命だ。佐賀刑事が甲府へ來た時は、汽車が今驛を離れたばかりの處で、一間の距離はなかつた。刑事は馬上から汽車の後部へ飛び移つた。

(七) 轟然たる音響!

汽車の中では剛藏始め部下の者も、最う安心をして居た。

『佐賀と云ふ奴ア敏捷い野郎ですな、新宿へ來た時にや影も見えなかつたのに、何時の間に此の汽車に乗り込んだのでせう。』

と高山が云ふと、

『今の刑事で乃公の恐れるのは彼奴だけだよ。併し今頃は最う土左衛門だろうよ。』と剛藏は心地宜げに笑つた。

『彼奴を形付けて、眞個に安心しましたよ。彼奴のお蔭で程ケ谷へも八重洲町へも寄り付く事が出來なかつたのだ。』

と高山は憎々しさうに云つた。

すると他の一人が、

『彼の野郎が居なければ、又東京へ歸つても可いでせう。』

『そりや差支なからうが、折角此處迄來たのだから、木曾へ行つて當分餘炎を冷ますさうよ。お龍の奴も待つてるだらうからな。』

恁う云つたのは剛藏である。お龍と云ふのは剛藏の女房で、彼が常に自働車を共にした例の美人である。剛藏は程ケ谷の巣窟を佐賀刑事に窺はれた時、早くもお龍に二三の部下を付けて、木曾の巣窟へ送つたのである。

『先生何うも御馳走様。』と云つたのは高山だ。

『馬鹿野郎ッ、乃公がお龍の事を云ふと直ぐ夫れだ。』

『先生は却々姐御に孝行ですからな。』

『喧しいやい。』

剛藏は恁う云つたが、顔には笑が見えて居た。

軈て汽車は木曾の福島に着いた。停車場にはお龍が迎へに來て居た。

『態々出迎へは御苦勞だつたな。』

剛藏は莞爾してお龍に恁う云ふと、

お龍は

『心配でならないから迎へに來たのさ、何うだね東京の樣子は。』

『面白くないよ、まア當分木曾で遊ぶんだね。』

『其の方が可いよ。』

話しながら剛藏はお龍を始め、高山と他の一人の部下を從へて

停車場前に待たせてある自働車に乘つた。

此の時一人の乞食が現はれて、窃と其の自働車の後に摑つて小さくなつて居たが、剛藏始め誰一人氣の付いた者はなかつた。

間もなく自働車は走せ出した。

軈て山腹の、とある別莊の前迄來ると自働車を止め、一同は其の別莊へ這入つたのである。續いて乞食も門を這入つて、勝手口の方へ廻ると、中の樣子を窺ひながら、

『哀れな乞食に、怎うぞ頂かせて下さいまし。』

女の聲で、

『出ないよ。』

『お手許は御面倒様で御座いますが、今朝程から何も頂きません
ので、腹が空つて動けません、お慈悲にお助け下さいまし。』
『五月蠅乞食だね。今夫れ處ぢやないよ、忙しくつて手が離せや
しない。』
乞食はヂロ〳〵周圍の様子を見ながら、静に門を出ると、穢い
手拭の頬被りを脱つた。此の乞食は別人でない、京橋署の佐賀刑
事である。
夕刻になると、刑事は福島警察署の應援を求めて兇漢の逮捕に
向つた。
そんな事とは知らないから剛藏以下の兇漢は、一室に集まつて

今や酒宴の眞最中である。
『全く先生の眼力にや驚きましたぜ、まさか車掌に化けて居やう
とは思ひませんからね。』と云つたのは高山である。
『確固しなくちや不可ないよ。そんな事ぢや立派な惡黨にやなれ
ないよ。』と云つたのはお龍である。
『全くですよ。』と他の一人が云ふ。
『だが彼の佐賀刑事を形付けて、まア一安心だね、彼奴が居ちや
電團も充分な活動が出來ないんだものね。是れからは大威張だ
よ。』とお龍は嬉しさうに云つた。
折柄此處へ一人の乞食が現はれた。一同の視線は夫れに注いだ

のである。

『貴様は何者だッ。』と剛藏は大喝した。

『誰でもない佐賀刑事だッ。』

恁う云つて頬被りを取ると、

『剛藏御用ッ。』と飛び掛つた。

『夫れッ。』と剛藏は部下に命を下した。

途端に四五人の警官は、バラ〳〵と現はれて、

『御用ッ。』

『御用ッ。』

と兇漢に飛び付いた。

銃聲、鞘鳴り、劍の光り、酒席は忽ち修羅場と化したのである

剛藏は隙を見て一個の小さな物躰を火鉢に投入した。轟然たる音響!! 警官も一時辟易いた。

此の隙に乘じて兇漢は、四方の窓を破つて逃走した。

『逃すなッ。』

『己れッ。』

と警官は追跡する。

剛藏は短銃を放ちながら、裏山へ登つて行く、

『剛藏、逃さぬぞッ。』

と佐賀刑事は追跡した。

登るに從つて山は險しくなつて來る。剛藏の短銃の彈丸も盡き た。彼は石を拾つて刑事に投げ付けながら登つて行く。

佐賀刑事は山の頂上で剛藏に追ひ付いた。

『御用ッ。』

『何をッ。』

兩人は暫く搭鬪して居たが、嗚呼何等の不幸？佐賀刑事は足踏み外して、

『アッ。』

と云ふ間もなく、幾十丈とも知れぬ谷間へ落ち入つた。

『樣ァ見ろ、青二才の癖に、乃公を逮捕しやうなどゝは生意氣だ

ッ。』

剛藏は恁う云ひながら山を降りて、別莊の樣子を窺つた。周圍は森として人の氣配もない。

『お龍は何うしたか、高山や其の他の奴等は何うしたらう……、無事に逃げて呉れゝば可いが。』

と剛藏は味方の身の上を案じた。

『何時迄恁うして居ても仕方がない、手の廻らぬ中此處を逃げやう。』

と彼は信州の善光寺へと志した。

剛藏は商人に變裝して、大膽にも其の夜は木曾の旅館に宿泊つ

て、翌朝長野行きの汽車に搭じた。

一方佐賀刑事は何うなつたか。木曾山中の谷間に落ちて哀れ一命を棄てたであらうか、否々天は決して此の忠實熱精な青年刑事の命を奪はなかつた。

夜も明方の事である。佐賀刑事の陷つた谷間を二人の樵夫が通つた。

『お前、昨夜の騒ぎ知つてるけえ。』

『己何にも知らねえ、何かあつたゞかね。』

『あつたゞか處の騒ぎでねえだ。お前此の山の向ふにある別莊知つてるけえ。』

『知つてるだよ、華族様の別莊だちうでねえか。』

『皆なさう云つてたけんど、ありや華族様ぢやねえ大泥棒なんだとよ。』

『さうけえ。』

と一人は目を圓くした。

『昨夜な、警察の手が這入つて、夫れは夫れは大騒動よ。』

『エヘー。』

『何でも子分が二人捕つたが、親分と云ふ奴ア逃げたと云ふ事だ東京から來た探偵が見えねえと云ふから、大方追つ掛けたに違へねえだ。』

『とつ捕まれば可いだがな。』
『さうよ。』
二人は恁麼話しをしながら、麓の細道を歩いた。

(八) 樵夫の深切

不圖樵夫の一人が、
『ヤッ、彼處に人が死んでる。』
と叫んだ。
『何處に……？。』
他の一人は目をギョロ〳〵させて、周圍を見廻した。

『彼處に……。』
と彼方の大きな木の根を指した。
『ヤッ、眞個だ。』
『行つて見やう。』
倒れて居たのは佐賀刑事である。
二人は刑事の傍に寄つて、身躰を調べたが、
『何處も怪我はして居ねえだ。』
『助かる者なら助けて遣りてへが……お前藥持つて居ねえかよ。』
『ある〳〵、寶丹持つてるだ。』
一人が寶丹を飲ませると、一人は谷間の水を手拭に濕して來て

刑事の口に注いだ。

『オイ、確固しねえかよ。』

と二人は強く刑事の背中を叩いた。

『ウーム。』

と刑事は息を吹き返した。

『しめたッ、オイ、何うしたゞよ。』

『氣を確にしねえよ。』

佐賀刑事は眼を見開いて、二人を瞶めた。

『氣が付いたゞか。』

『まア可かつた。』

二人は介抱をした甲斐のあつたのを喜んだのである。

我に返つた佐賀刑事は、

『やられたかッ。』

と叫んだ。

『何うしたゞかね。』

二人は驚いた如に恁う云つた。

『貴下方のお蔭で、僕は一命を助かりました。厚く感謝致します

僕は生命を賭して居りますから死のは厭はないですが、兇漢を逮

捕しない中は……。』

刑事は、つと立上つたが、

『あ痛ッ。』

と云つて再び腰を下した。

『無理しねえが可いだよ……、すると何かね、貴下は警察の方かね。』

『さうです。』

『そりやお氣の毒だ。私の家は直ぐ此の先だから、私の家で少し躰を休めたら怎うかね。』

『いや有り難う、別に怪我はないやうだが、何だか躰が痛んで仕様がないから、少し休ませて貰ふ事にします。』

『夫れが可いだ。ぢや私に背負さるが可いだよ。』

『氣の毒ですな。』

『何に、構は無え、是れもお上の御用の内だ。』

年長の樵夫は佐賀刑事を肩にして、我家の門口を這入つた。

『オイ、床を敷いて呉んろよ。』

女房らしいのが出て來て、

『お前さん何うしたゞかね。』

『警察のお方だ、休ませて進げろよ。』

聽て佐賀刑事は、穢いながら布團の上に横になる事が出來た。

少時横になつて居たら痛みも去るであらうと思つたのに、夕刻から刑事は非常に發熱した。醫者をと思つたが此の村には醫者が

ない。何うしても福島迄行かねばならぬ福島迄は四里の道程がある。是れから行つた處で到底今夜の間に合はないのであつた。

樵夫夫婦は心配をしながら、深切に看護をした。

『なァお槇、今夜は間に合はねえ迄も、己是から醫者の處へ行つて來るよ。そして警察へも此の話しゝたが可いと思ふだがな。』

お槇と呼ばれたのは樵夫の女房で、樵夫は杉山林吉と云ふのであつた。

『夫れが可いだよ。』

とお槇は賛成した。

『ぢや行つて來るからな。』

と林吉は出て行つた。

山に馴れた林吉の足は早かつた。夫れでも日は最う暮れて居た

『お願え申します。』

林吉は福島警察署の受附口で恁う云つた。

『何だッ。』

と云つたのは受附の巡査である。

『私は此の在の林吉ちう者だがね、私の家に警察の人が病氣で臥て居るだから、鳥渡お知らせに來ましただ。』

『貴樣の家に警官が臥て居ると云ふのか。』

『さうだよ。』

『何うして臥て居るのだ。』
『布團敷いて臥て居るのだ。』
林吉は眞面目で云つた。
巡査は微笑して、
『夫れは分つとる。何う云ふ譯で警官が、貴樣の處に病氣で臥て居るのだ。』
『今朝谷間に氣絶して居たのを、助けて來たのだ。』
『氣絶ッ。』
と巡査は叫んだ。
『さうだよ。』

『して其の警官の氏名を知つてるか。』
『氏名て何だね。』
『名前を知つてるかと云ふのだ。』
『あゝ名前かね、名前は……。』
云ひながら林吉は懷中を探して、一枚の名刺を出した。
『是れだ、是れが其の人の名前だよ。』
巡査は名刺を受け取ると、
『何ッ、佐賀刑事がッ。』
と驚いた如に云つて、林吉に、
『少し待てッ。』

と云ひながら、警部の前へ名刺を持つて行つて、二言三言話しをした。

すると警部が奥から出て來て、

『林吉と云ふのはお前か。』

『へえ。』

『御苦勞だつたな、今直ぐに警察から迎へを遣るから、お前案内をして呉れ。』

林吉は迷惑さうな顔付で、

『私是れから醫者の處へ寄つてくだがね。』

『他に病人があるのか。』

『さうぢやねえだ、警察の人診て貰ふだ。』

『夫れなら警察で伴れて行くから宜しい。』

『そんなら直に案内するだ。』

警部は署長の命令を求め、非番巡査や警察醫を呼び出す迄に約一時間を費した。

林吉は待ち遠で堪らなかつた。

事務室の奥の方で警部は二名の巡査に向つて頻りに何事か話して居た。

『林吉ッ。』

と呼んだのは受附の巡査である。

『へえ。』

『鳥渡上れ。』

林吉は警部の前へ通された。警部は林吉に佐賀刑事を助けた模様や、病氣の容躰などを尋ねた。

林吉は尋ねらるゝまゝに詳しく物語つたのである。

『警察醫は何うした。』

と警部が云ふ。

『未だ見えません。』

と一名の巡査が答へた。

『何をして居るんだらう、仕樣がない……小使アひ。』

『ハイ。』

『最う一度警察醫を見て來い。』

と警部は一人で氣を揉んで居る。

處へ、

『どうも遲くなりました。』

と警察醫が這入つて來た。

聽て二名の巡査と警察醫は、林吉を道案内として彼の住居へ急いだのである。

(九) 闇夜の銃聲

林吉の女房お槇は、良人の歸りを待ち佗びながら刑事の看護をして居る。

『種々厄介を掛けて濟まないね。』

恁う去つたのは佐賀刑事である。先刻より熱も大分下つて居た

『何に貴下、そんな事心配しねえが可いだよ。』

お槇が云ふ。

『未だ林吉君は歸らないかね。』

『最う歸りさうなもんだが、何して居るだかね。』

とお槇は心配さうに云つた。

折柄此家の裏口へ、覆面をした三個の怪し氣な人影が現はれた

手には各自短銃を持つて居る。

『居るか。』

『居る〳〵。』

『靜かにしろよ。』

『臥て居るやうだ。』

『しめ〳〵。』

『一人限りか。』

『女が居るよ。』

『手强いから油斷するな。』

『大丈夫だ。』

囁きながら一人は、窃に刑事の臥て居る室に近付いた。

ミシリ〳〵と云ふ足音に、刑事は傍の短銃を握ると同時に、

『フッ。』

と枕頭の洋燈を消した。

『何をするだね。』

と云つたのはお槇である。

『お前は早く逃るが可い。』

『何故ね。』

『賊だッ。』

『エッ。』

とお槇は表へ飛び出した。

折しもズドンと一發の銃聲を合圖に、

『夫れッ。』

と惡漢三人は、刑事の臥室へ亂入した。

臥室は暗黑である。三人は一齊に懐中電燈で刑事の臥床を照した。

『オヤッ。』

『居ねえぞッ。』

『逃げたかッ。』

惡漢は懐中電燈で室内を見た。

途端に一隅よりズドンと一發！。

『アッ。』

と一人の惡漢は撞と倒れた。

續いて二發、三發！

『うぬッ。』

と惡漢も刑事目掛けて短銃を放つた。

病中でさへなくば、二名位の惡漢に恐れる佐賀刑事ではないが今は充分働く事が出來ない、隙を見て窃と廊下へ出た。賊も續いて廊下へ出て來た。

佐賀刑事は惡漢の放つ短銃の彈丸の下を潜りながら庭へ飛び下

りやうとした。けれども刑事の躰が利かない爲め、思はず撞と倒れたのである。

『しまッたッ。』

と叫ぶと同時に、二名の惡漢は刑事に飛び掛つた。

佐賀刑事の一命は今將に絶れんとした。

折柄林吉は、二名の巡査と共に此場へ驅け付けた。

惡漢は巡査の靴音を聞くと、垣根を越えて逃げ出した。

『うぬッ。』

林吉は垣根の棒を拔き取つて、惡漢を追跡した。二名の巡査も後に續いた。

けれども遂に逮捕する事は出來なかつたのである。

『忌々しい事をした。』

と林吉は歸つて來た。

佐賀刑事は、林吉より一足遲れて來た警察醫と、お槇に助けられて舊の床の上に横になつて居た。

『別に怪我はしなかつたかね。』

と林吉は刑事に聞いた。

『有り難う……別に何うもしなかつた。』

と佐賀刑事は答へた。

『夫りや可かつたゞね。私巡査さんと一緒につい其處迄來ると、お槇が血相變て飛んで來たのにバッタリ會つたゞ、樣子を聞いて驚愕して驅け付けたゞ、一足遲けりや大變だつたにまア可かつた』

と林吉は嬉しさうに云つた。

『眞個だアよ。』

とお槇は相槌を打つた。

處へ二名の巡査も歸つて來た。

『失敗々々。』

『殘念な事をした。』

と二巡査は落膽して恁う云つた。

『ヤア人が死んでらア。』

と林吉は始めて氣が付いたのである。

『ぢや先刻やつゝけたんだ。』

と佐賀刑事が云つた。

二巡査は、

『搭闘したんですか。』

『貴君が……。』

と口々に云つたのである。

『さうです、彼の死骸の右腕に、ハート形の文身があるでせう、調べて見て下さい。』

佐賀刑事に云はれて警察醫は、死體を檢査して、

『あります〳〵。』

と云つた。

『矢つ張り剛藏の部下なんです、殘念な事をした一人でも逮捕すれば剛藏の行衛が分つたらうに……。』

と刑事が云ふと、

『剛藏の部下なら、二人逮捕してあります。』

と一人の巡査が云ふ。

佐賀刑事は、

『エッ、逮捕してありますか、夫れはお手柄でした。』

と嬉しさうである。

警察醫の診察によると、佐賀刑事の病氣は思つた程ぢやない、一週間も經てば全快するとの事であつた。

そこで五頭の駄馬を傭ひ、佐賀刑事を始め巡査、警察醫は何れも馬上の人となり、殘る一頭の馬には惡漢の死骸を括し着け、林吉が其の手綱を執つて警察署へと急いだ。

警察署へ着くと、佐賀刑事は早速福島病院へ入院した。

入院してから四日目の事である。佐賀刑事の許へ一通の書面が來た。差出人は梶原剛藏としてある。ハッとして封を切る間も遲しと讀み下すと、

佐賀大刑事足下、小生は目下長野市の一隅に滯在す、至つて

無事なり、我が好敵手として足下の來長を希望す。

梶原剛藏

佐賀大刑事殿

と認めてあつた。

佐賀刑事は果して長野から出したものかどうかを疑つて、消印を調べて見ると長野としてある。僞りではない。

『チョッ、忌々しい奴だ。病氣でさへなければ……。』

と齒嚙みをして殘念がつた。

折柄看護婦が這入つて來た。

夫れと見た刑事は、

『院長を呼んで呉れ。』

と頼んだ。

『ハイ。』

看護婦が出て行くと間もなく院長が來た。

其の顔を見ると、

『院長！。』

と叫んだ。

『何ですか？。』

院長は平然として答へた。

『僕、退院したいです。』

『退院……未だ二三日は駄目です。』

『どうかして退院して下さい。』

『折角快い方になつたのに、今無理をしては不可ません。最う二三日辛抱なさい。』

院長は恁う云つて、頻りに宥めたのである。けれども佐賀刑事はどうしても承知れなかつた。其の翌日無理に退院すると直ぐ、長野市へ向つた。

（十）悠々とした逃走

木曾の別荘へ踏み込んで、搦闘の末福島警察署の手で逮捕した

二名の兇漢は、一人は剛藏の一子分たる高山で、一人は別莊番を勤むる酒田と云ふ子分であつた。

彼等兩名は今日しも東京へ護送さるべく、京橋署から出張して來た加藤、小倉の兩刑事に引渡された。

兩人は嚴重なる捕繩を受けて汽車に乘せられたのである。

加藤刑事は車中の退屈まぎれに種々な事を兇漢に聞いて見た。

『貴樣等は剛藏の逃げた先きを知つてるのだらうな。』

『一向に知りませんよ。』

『併し貴樣等の仲間には、氣脈が通じて居ると云ふぢやないか。』

『夫りやさうですよ、東京に居て長崎や北海道の團員の樣子は、

すつかり分りますからね。』

『だから剛藏の事も分つて居るのだらう。』

『夫りや分りませんや、此方が捕まつてるんですからね。』

汽車は今松本平を走つて居る。鹽尻で乘換の必要があるので、兩刑事はそろ〳〵其の仕度に掛つた。

『オイ、今度は乘り換だぞ。』

と加藤刑事が云ふと、

『さうですな。』

高山は、そんな事は知つて居ると云はないばかりの返事をした程なく汽車は鹽尻へ着いた。

『諏訪、甲府、東京方面行はお乗換へ。』

と掛員は叫んで居る。此の汽車は長野行きである。

兩刑事は兇漢と一緒に此の汽車を下りると、東京行きに乗り換へた。

折柄二人の紳士風の男が乗り込んで、刑事と背中合せに腰を下した。

汽車は進行を始める。

二人の紳士風の男は、間斷なく煙草を喫つて居る。暫くすると一人の男は、隱衣から小形の懐中電燈の如なものを取り出して、其の口に護謨管を篏め、一方の口を窃と兩刑事の間に差出した。

間もなく兩刑事は頻りに目を擦り出したのである。

『小倉君、僕は眠くつて仕様がないよ。』

と加藤刑事が云ふと、

『僕も眠くて仕様がないよ。』

と小倉刑事は眠むさうな目をして居る。

『どうも可怪しい。』

『眞個妙だよ。』

云つてる内に兩刑事は、ぐつすり眠込んで了つた。

それと見た紳士風の男は、隱衣からナイフを取り出し、窃と兇漢の傍に寄つて、兩人の捕繩を切斷た。

汽車は上諏訪へ着いたが、兩刑事は未だ目が醒めなかつた。紳士風の男は兇漢の高山、酒田と一緒に上諏訪で下車たのである。

恐らく此の位悠々とした逃走はあるまい。

兩刑事は甲府迄來て始めて眠りから醒めたが、不圖見ると護送して來た兇漢が居ない、二人は青くなつた。

『しまッたッ。』

『逃したッ。』

『い、忌々しいな。』

『魔酔劑をやられたんだ。實に殘念ッ。』

『併し何處で逃げたのだらう……。』

『さア、分らないね、仕方がない署へ電報を打つて置かう。』

兩刑事は一時甲府に下車して、電報を打つてから種々相談をしたが、別に好い考は浮ばなかつた。

次の汽車で兩刑事は悄々して京橋署へ歸ると、署長は烈火の如に憤つて、

『君等は何の爲めに信州迄出張したのだ、犯罪者を護送する職務を帶んで出掛けたのだらう、しかも其の犯罪者は普通の罪人と違つて、天下の人心を寒からしめた大事件の共犯者であるのだから、充分注意をせねばならぬ筈ぢやないか。』

『誠に申譯がありませんでした。』

『佐賀刑事であつたら、恁麽失策はなからうに、實に殘念な事をした。』

恁う云はれると兩刑事は何共面目がなかつたのである。

かゝる事件があつたとも知らず、佐賀刑事は長野市へ到着した併し長野市の一隅とばかりで剛藏は何處に居るのか不明であるので、刑事は病後の身の未だ恢復しない蒼い顏で捜索に從事した。

長野市は善光寺があるだけに、土地の割合に宿屋が多い、佐賀刑事は一々其の宿屋を調べて見たが剛藏らしい者は居なかつた。

『何處に居るんだらう……、忌々しい奴だ。』

恁う思ひながら刑事は、屑屋に化け、藥屋に化け、乞食に化け

て毎日の如に市中を歩いて見たが、夫れらしい者は見付からなかつたのである。

『奴に一杯食はされたか知ら……。』

佐賀刑事は其の疲勞した躰を、とある橋の欄干に凭掛けた。

初冬の夜の幕は晝の世界を包んで、空には星が輝いて居る。

折柄二輛の人俥は、紳士風の男を乘せて刑事の前を疾走り過ぎた。

『占たッ。』

佐賀刑事は思はず叫んだ。

俥に乘つた紳士風の一人は剛藏であつたからだ。

刑事は附近の商店から自轉車を借り受けて、俥の後を追跡した。二輛の人俥は西に走せて市外の裾花川に接した一軒の門構の家の前に止まつた。

『君等は何處から來たのだね。』

刑事は門前で汗を拭ひて居る車夫に恁う尋ねた。

『何處から來ても大きにお世話だ。』

刑事は藥屋の服裝であつたから、車夫は普通の藥屋と思つて、恁う云つたのである。

刑事も夫れと察して、

『乃公は恁う云ふ者だ。』

と一葉の名刺を示した。

車夫は急に笑顔になつて、

『へ、へ、、さうですかい、私やア普通の藥屋だと思つたものですから、飛んだ失禮を……へッへッへッ。』

と頭を掻きながら、ピョコ〳〵お辭儀をした。

『そんな事は何うでも宜しい、今の客は何處から乘せて來た。』

『へイ、青雲亭からで……。』

『青雲亭と云ふと料理屋ぢやないか。』

『左樣で……。』

『是れ迄度々乘せた事があるのか。』

『否、今夜が始めてよ。』

『さうか、いや足止めをして濟まなかつたね。』

『どう致しまして。』

車夫は振り返りながら、此場を去つた。

刑事は夫れを目送つて了ふと、直に警察へ電話を掛けて應援を求めたのである。

（十一）黑烟朦々

應援の一隊は一名の部長が六名の巡査を引率して、間もなくやつて來た。

『いやどうも御苦勞です。』

と云つたのは佐賀刑事である。

部長は

『兇賊の所在が判明致したさうで……。』

『漸く分りました。今度は是非共逮捕致したいので、御盡力を願つた次第です。』

『で、捕縛について何う云ふ手段を執るお考へですか。』

と部長が云つた。

『夫れについて、打合せをして置きたいのですが……此處では人目に立ちますから……。』

『ぢや彼方へ參りませう……皆な靜に此方へ來た。』

と部長は一同の巡査を伴れて裾花の河畔へ出た。刑事も其後に續いた。

裾花川の水音は、靜な周圍の沈默を破つて居る。

寒い夜の河畔で打合せが濟むと、一同は其處を去つて怪しい家の周圍を取り卷いた。

と、一人門内へ忍び込んだ者がある。夫れは佐賀刑事であつた家内は悄然して人の氣配もない。

『逃げたのか知ら。』

と刑事は疑つた。

折柄何處からともなく話し聲が聞えて來た。刑事は其の聲を頼りにして奥へ〳〵と進んだ。暗い廊下を足音を忍ばせて行くと突當りは壁である。他に行く處のない此の廊下には何か仕掛けがあるに違ひない、刑事は窃と其の壁を突いて見た。

壁は音もなく無雜作に、スプリング仕掛けのカーテンの如にスーと上に上つた。室内からは眞晝の如な光線が、刑事の躰に浴せ掛つた。刑事はハッとした。

開く事は開いたが、其の壁を締める方法は刑事には分らなかつた。其處の室は一段低くなつて居て、正面に扉がある。話し聲は其處から洩れるのであつた。

刑事は扉の隙間から室内を覗いて見ると驚いた。室は十疊程の一間で、其處には剛藏やお龍や、そして逮捕された筈の高山や酒田の外に二三人の子分が、車座になつて酒を飲みながら、

『貴樣にも似合ねえ何だつて田舍の巡査なんかにやられたんだ。』

と云つたのは剛藏である。

『夫れがね先生、間の惡い時は仕樣のねえもんで、逃げる途端に石に躓いて轉んだんです、其處へ三人ばかり來やがつたもんですから、飛んだドヂを踏みました。』

と高山は頭を搔きながら云つた。

『氣を付けねえぢや不可ねえ。』

『最う大丈夫です。』

『どうだか分るものか。』

『ハヽハヽヽヽ。』

『ハヽハヽヽヽ。』

と高く笑つて、

『私も監獄行きは未だ早いから、護送の途中逃走する積りでしたが、二刑事の奴等が親の敵でも捕へた氣で力んで居やがるので、何うする事も出來なかつた處へ、天野と小林が來て呉れたんで助かりました。』

と高山は嬉しさうに云つた。

『探偵の奴等、何處いらで眼が醒めたでせう。』
と酒田が云つた。
高山は、
『多分甲府邊りだらうよ。』
『眼が醒めて見ると、大事なお客樣が居ねえので、驚いたでせうな。』
と天野と云ふ子分が口を出した。
『二刑事の奴等何うしたでせう。』
今度は小林と云ふのが云つた。
『無論免の字さ。』

と高山が口を開いた。
酒田が、
『好い氣味だなア。』
と云ふと、一同はまた、
『ハヽハヽヽ。』
『ハヽハヽヽ。』
と高く笑つた。
佐賀刑事は扉の外で、
『すると奴等は、護送の途中逃走したのか、忌々しい奴だ。』
と心の中で口惜がつた。

剛藏は高山に向つて、

『時に高山、佐賀の野郎が福島病院に居ると聞いたから、此の間乃公が調弄半分に奴の處へ手紙を出して置いたが、幾ら佐賀でも此處とは豈夫氣が付くめい、彼奴が居るばかりで我々團員は充分の活動が出來ねえのだから、今度見付けたら殺つゝけて了ふ事にしたいな。』

『夫れが可いです、彼奴のお蔭で電團は縮こまつて居るんですからね。殺つ付けませう、屹度殺つゝけますよ。』

『其の氣で私がお酌をして進げやう。』

とお龍は德利を手にした。

『濟みませんな姐御……。』

と高山はコップに滿々注いで貰つて、ぐッと飲み干した。

佐賀刑事は時分を見計つて、合鍵で扉を開けると短銃を手にして突然飛び込んだ。

『剛藏ッ、佐賀だッ、縛に就けッ。』

『何をッ、夫れッ。』

兇漢は刑事を目掛けて短銃を放つた。

刑事は

『生意氣なッ。』

と云ふより早く、隱衣から小さな函を取り出したかと思ふと、

夫れを室の中央に投げ付けた。

小函は忽ち爆發して、黑煙は朦々と室に漲り、咫尺を辨じ得なかつた。

兇漢は無暗に短銃を放つたが、刑事は何の恙もなかつた。

一種の藥を口にして居ない以上、此の煙に包まれては昏倒するのが常である。銃聲はパッタリ歇んだ。煙りも段々に薄らいで來た。

室には五人の兇漢が倒れて居る。其の中にお龍も居つた。

刑事は、

『占めたッ。』

と叫んで、剛藏は何れであらうと調べて見ると、高山以下三人の兇漢とお龍は居るが、肝心の剛藏は見えなかつた。

『逃がしたかッ。』

と刑事は殘念がつた。

不圖見ると、一方の壁に穴が開いて居る。其處を覗くと階段が見えた。

『此處から逃げたに違ひない。』

刑事は其の階段を下りやうとした。

途端に、

『どうです結果は……。』

と云ひながら部長は三人の巡査を率て這入つて來た。
『殘念です、肝心の剛藏を逃しました。』
『逃げましたか……外圍に異狀はないですがね。』
『兎に角僕は追跡します。』
『さうなさい、跡は引き受けました。』
『どうぞ願ひます。』
刑事は穴を這入つて、階段を下りた。
部長は三名の巡査と協力して、お龍と高山以下三人の兇漢を高手小手に縛めた。
『オイ、コラ、確固しろ。』

部長に恁う云はれて、我に返つた時に始めて自由の躰でないのを知つて、
『殘念だッ。』
と口々に叫んだ。
高山は戒められたお龍を見て、
『姐御、縛られましたね。』
『私や口惜いよ。』
お龍は齒噛をして恁う云つた。
『先生は……。』
『私やしらないよ。』

『旨く行つたんでせう、可い鹽梅に……。』

高山は莞爾した。

聽て一同は警察署へ引致されたのである。

（十二）　韋駄天の如く

佐賀刑事は階段を下りて見ると、二疊敷程の間があつて、夫れから先きは隧道の如になつて居る。

『拔け穴だな。』

恁う思ひながら刑事は、眞暗な此の穴を七八間程來ると又階段になつて居る。其の階段を上ると其處は出口らしいが、扉の如な

もので嚴重に押へてある、夫れを無理に破つて出て見ると、此處は裾花の河畔であつた。

不圖彼方を見ると、黑い影が飛んで行く、

『剛藏に相違ない。』

刑事は韋駄天の如く、其の跡を追ふた。

人影は果して剛藏であつた。

『待てッ。』

と刑事は呼び止めた。

佐賀刑事の追跡を受けたと知つた剛藏は、一生懸命である。

折柄自轉車に乘つて來た男があるので、剛藏は突然其の横面を

殴つた。

男は不意を食つて、

『アッ。』

と叫んで自轉車と共に揺と倒れた。

剛藏は其の男には目も呉れず、自轉車を奪ひ取ると夫れに乗つて疾走した。

如何に佐賀刑事でも、自轉車を利用されては追つ付ける筈がない。

『此處迄來て見逃すのは殘念だッ、何か乗り物はないか。』

と周圍を見廻す折しもあれ、幸ひなるかな一臺の自働車が進行

して來た。

『有り難いッ。』

と刑事は其の自働車を借りて追跡した。

剛藏が幾ら全身の力を込めて自轉車を運轉しても、自働車に全速力をかけられては及ぶ筈がない、剛藏は殊更に傍の細道に自轉車を反らして進んだ。其の細道へは到底自働車を入れる事が出來ないので、刑事はヒラリ飛び下りて剛藏の行手を見れば最う山である。

彼は自轉車を棄てゝ其の細い坂路を猿の如に上つて行く。

『待てッ。』

刑事は、また呼び止めた。

剛藏は一二發短銃を放つたが、刑事には中らなかつた。彼れは餘程疲勞れたらしく、足を引摺りながら上つて行くのである。刑事も非常に疲勞した。

坂路を上り詰めると、一間程の道路へ出た。道路の傍には二三軒の農家があつて、馬の嘶きが聞えた。剛藏は馬小屋から農馬を引き出す間も遲く夫れに乘つて一散に走らせた。刑事も亦一頭の農馬に跨つて、

『待てッ。』

と一聲追跡した。

物音に驚いて、農家の主人が出て見ると農馬が居ない、

『ヤア大變だ、馬泥棒だッ。』

と騷いだので、隣りの親爺も飛び出して來たが、

『ヒヤア、己ア處の馬も盗まれたゞ、オーイ田吾作、杢兵衛、畑之助、皆な出て來よ。』

呼ばれて農家の若者は、手に〳〵得物を持つて飛び出して來た

『何だ〳〵。』

『泥棒だ、馬泥棒だッ。』

『甚麽野郎だ。』

『甚麽野郎だか、顏を見ねえから知らねえだ。』

『何でも四五人居たやうだ。』
『一躰何方へ逃げたのだ。』
『彼方だ〳〵。』
『夫れッ。』
と追ひ掛けて見たが、最う影も形も見えなかつた。
剛藏は東へ〳〵と志して一里程來ると、かなり大きな河へ出た。岸には渡し船と云つた如なのが二三艘浮んで居る。彼は馬を棄てゝヒラリ其の船に乘り移つた。佐賀刑事も夫れに續いた。
河の流れは急であつた。對岸へ着ける積りであつたのだが、馴れぬ手に持つた櫂は意の如くならないので、船は次第に河下へ流

された。剛藏の船と佐賀刑事の船とは最う五六間の距離になつた夜は更けたが月夜である。剛藏の姿はあり〳〵と見る事が出來た
『剛藏、感念して縛に就け。』
『何を馬鹿なッ。』
『此處迄來れば最う逃さんぞ。』
『生意氣な事を云ふな、青二才奴ッ。』
『青二才でも佐賀刑事だ、屹度逮捕して見せるぞ。』
『オヽ好く云つた。天下の兇賊梶原剛藏、捕縛が出來たら褒めて遣るわッ、ハッハッハッ。』
大膽不敵の惡漢剛藏は、恁う云つて高く笑つた。

折柄船は一つの橋に近付いた。剛藏は櫂を棄てゝ橋杭に飛び付いたかと思ふと、飛鳥の如くヒラリ橋上に飛び上つた。

『先づ是れで大丈夫だ。』

と安心した途端に後から、

『御用だッ。』

と組付いたのは佐賀刑事である。

流石の剛藏もハッとしたが、

『何をッ。』

と夫れを振り拂つて、一散に驅け出した。

『待てッ。』

と又も追跡が始まつた。

夜は白々と明けて來た。

剛藏も刑事も全身汗である。

此の時上野行きの列車が、黑煙を吐いて進行して來た。

剛藏は、

『占たッ。』

と心に叫んで、汽車の後部に飛び乘つた。刑事も續いて飛び乘らうとしたが、剛藏の放つ短銃が危險であつたので、身を反して居る中に汽車は遠ざかつて了つた。

刑事は、

『殘念だッ。』

と齒噛をして汽車を見送つた。

不圖刑事は、彼方に飛行機の手入れをして居る者があるのに氣が付いた。

『さうだッ。』

と一散に其の傍へ走せ寄つて、

『甚だ突然ですが、折入つて貴下にお願ひがあります。』

『何ですか。』

と飛行家は振り向いた。

『僕は京橋署の刑事で佐賀と云ふ者ですが、只今此處迄兇賊を追

跡して來ました處、賊は進行中の汽車に飛び乘つて逃走して了つたのです、怎うか貴下の飛行機に僕を乘せて、汽車の跡を追つて下さい。』

『貴下が佐賀刑事ですか、宜しい、承知しました。』

『御承知下さいますか。』

『可いです、さお乘りなさい。』

刑事は喜んで、飛行機に乘り込んだ。

軈て飛行機はプロペラーの音高く飛翔して、剛藏の飛び乘つた汽車を目掛けて進むのであつた。

（十三）飛行機より汽車へ

冬の朝の空は身を切られる如に寒い。

佐賀刑事は地上に目を移すと、汽車は今飛行機の眞下を走つて居る。

刑事は、

『ヤッ、汽車が……。』

と子供の如に叫んで、そして身を躍らせた。

『此の邊は氣流が險惡で危險なんですから、體を動さないやうにして下さい。』

と飛行家は云つた。

佐賀刑事も兒戯に等しい己が行爲を、心窃かに嘲笑つた。

聽て刑事は決然として、

『僕、彼の汽車に乘り移りたいのですが、此の飛行機を低下て頂く譯には參りませんか。』

『出來ない事はありませんが、怎うして乘り移るのです。』

『飛行機から汽車の屋根に飛び下ります。』

飛行家は驚いて、

『夫れは危險です。お止しなさい！。』

『併しどうしても彼の汽車に乘り移る必要があるのです。』

『若し仕損じたら、一命に係るぢやありませんか？。』
『僕は死んでも構ひません……。』
飛行家は頻りに止めたのであるが、刑事は怎うしても承知ないので、
『ぢや低下る事に致しませう。』
飛行家は把手を廻した。飛行機は汽車の屋根に接するかと思はれる程下降した。夫れでも數十間の距離はあつたのである。
『綱がありませんでせうか。』
と刑事は尋ねた。
『何にするんです？。』

『飛行機から綱を下げて、夫れに傳つて下りるのです。』
『夫れなら此の綱が可いでせう。』
と飛行家は一筋の綱を貸して呉れた。
刑事は夫れを借り受けると、其の一端を飛行機に結び付けて、
『怎うも御厄介でした。ぢや失敬します。』
『充分注意した方が可いですよ。』
刑事は綱に掴まると、スル〳〵と身を辷らせたかと見る間に、進行中の汽車の屋根へ、ドッと落ちた。
併し刑事は無事であつた。屋根傳ひに後部の列車の窓から中へ這入つたのである。

夫れと見て飛行家も安心した。直に機の方行を轉じて舊路へ歸つたが、忽ち雲に隱れて了つた。

後部車掌は、突然窓から一人の男が這入つて來たので、一時は驚いたが刑事に名刺を示されて漸く安心した。

『先刻此の瀛車に飛び乘りをした男があるのですが、君知りませんか。』

佐賀刑事は恁う車掌に尋ねた。

『知りませんね。』

車掌は不思議さうな顏付で答へた。

『さうですか、そして此處迄來る間に飛び下りをした者もありま

すまいな。

『夫れは慥にありません。』

『ぢや居るのです、屹度乘つて居ます。』

佐賀刑事は剛藏の變裝を豫期して居た。此の前彼れの爲めに失敗を取つた刑事は、今度こそ彼れに一泡吹かせてやらうと念入に變裝に着手した。

車掌は刑事の敏捷な變裝ぶりを感心して見て居た。

間もなく刑事は、怎う見ても眞物としか思はれない露西亞人になつて了つた。

『怎うですか貴下、私、露西亞人見えますか。』

と刑事は笑ひながら、發音まで變へて云つた。

流石に車掌も茫爾して、

『どう見ても、眞物ですよ。』

と巧な刑事の變裝ぶりを賞讃した。

滝車が篠の井へ着いた時に、佐賀刑事は夫れとなく車内を歩いて見ると、二等室の一隅に新聞を讀んで居る老人に目が注いた。頭髪は勿論眉も髯も雪の如に白く、顎髯は膝の邊り迄垂れて居るが、何處となく顔に若い處が見えたのである。

果して此の老人は剛藏の變裝姿であつた。剛藏は佐賀刑事の露西亞人が此の室へ這入つて來た時に、チラと其の姿を見たが、流

石の剛藏も刑事の變裝とは心付かず安心しきつて居た。

刑事は悠然と、剛藏の斜向ひに腰を下して、其の一擧一動に注視した。

佐賀刑事の隣席には一人の紳士が居て、チロ〳〵刑事の顔を見て居たが、突然、

『失禮ですが貴下のお國は露西亞ですか。』

と尋ねた。

刑事は五月蠅奴と思つたが、默つても居られないので、

『さうあります。』

と答へた。

すると紳士は乘り氣になつて、

『さうですか、私も莫斯科には暫く居りましてね……。』

と云つたが、後は露語で何やら辯舌り出した。

露語を知らない佐賀刑事は、閉口した。そして是れが爲めに化の皮が露はれやしないかと心配した。

『私、子供時分本國出ました。日本に永く居ります。本國言語より、日本語能く分ります。』

と刑事は顏を赤くした。

『さうですか……。』

と紳士は莞爾して、

『今度の戰爭も永引きますね。』

『何時迄も戰爭する駄目あります。早く止す宜しい。』

『ワルソーの陷落は、露西亞に取つて非常の打擊ですな。』

『さうあります。』

恁麼話しをして居る間、剛藏は兩人の樣子をチョイ〳〵見て居た。時には刑事と剛藏の視線がパッタリ合つた事もあつた。

佐賀刑事は早く紳士の傍を離れたいと思つたが、今此の席を立つては剛藏に怪しまれると察したので、ヂッと辛抱して居た。

瀛車が高崎へ着くと、

『ヤ、失禮しました。』

恁う云つて紳士は出て行つた。

刑事は、

『先づ可かつた。』

と安心した。

其の安心は可かつたが、不圖見ると何時の間にか老人の姿が消えて居る。

『オヤッ。』

と刑事は驚いて、立上る途端に汽車は進行を始めた。

『何處へ行つたのだらう……？。』

刑事は車中を彼方此方捜して見たが、姿は遂に見えなかつた。

『可怪しいな。』

と刑事は腕を組んだ。

始めの内は飽迄も眞物の露西亞人とのみ思ひ込んで居た剛藏も紳士との會話の最中に何となく不審の點があるので、注意して見ると眞物ではなくて慥に佐賀刑事である。

『旨く化けやがつたな。』

と思ひながら、

『何時の間に此の瀛車へ乘り込んだのだらう？。』

剛藏は飛行機の事は知らないから、其の敏捷に驚いたのである

『危い處だつた。』

剛藏は刑事の隙を見て、ヒョイと外へ出た。そして何時の間にか材木を積んだ荷車の中に隠れて居た。

流車が大宮を離れた時、彼は窃と姿を現はしたが、其の時は最う變裝は除去いてあつた。剛藏は何をする積りか荷車を傳つて、機關車に接近した。

(十四) 逃げ行く機關車

剛藏は突然機關車へ飛び込んだ。アッと驚く火夫を突き落し、機關士に躍り掛つた。

『何をするッ。』

『生意氣なッ。』

暫く格闘したが、機關士は遂々剛藏の爲めに頸を締められて、

『ウーム。』

と其の場へ倒れて了つた。

『馬鹿奴ッ。』

剛藏は恁う云つて微笑を洩したが、又も荷車と傳はつて、客車と荷車とを連結してある鎖を切斷して、再び機關車へ立ち戻つたのである。

客車は其の場に取り殘され、機關車は荷車を引いて疾走した。

云ふまでもなく此の列車は、混合列車であるから、機關車と客

車との間には荷車が挾まつて居たのである。

夫れと知つた乘客の驚きは一方でなかつた。

『ヤア大變！大變！。』

『機關車が客車を棄てゝ、逃走しますよ。』

『氣が付かないのでせうか、機關士は……。』

『オーイ、オーイッ。』

『呼んだつて最う聞えませんよ。』

とワイ〳〵騷ぐ。

一方では取り殘された車掌が、乘客の包圍攻擊を受けて、目ばかりパチ付かせて居るのであつた。

佐賀刑事は早くも剛藏の處爲と知つて、

『殘念な事をした。彼の時に逮捕すれば可かつた。』

と口惜しがつた。

併し何時迄も恁うして居る譯に行かないから、附近で自轉車を借り受けて剛藏の跡を追ひ掛けた。

刑事は一生懸命で王子の附近へ來ると、其處に剛藏の乘つたらしい荷車を連結た機關車が停車つて居た。急いで來て見ると機關士が一人倒れて居るだけで剛藏の姿は見えなかつた。

『遂々逃がして了つたか。』

と流石の刑事もがつかりした。

『仕方がない……此處迄來たのだから一先づ京橋署へ行つて見やう。』

と佐賀刑事は警察署へ急いだのである。

署長は刑事の顔を見ると、

『ヤア佐賀刑事？御苦勞でしたな、怎うでした結果は……。』

『實に殘念です、實は……。』

と佐賀刑事は今迄の事を落ちもなく物語つた。

一々感服して聞いて居た署長は、

『さうでしたか、概略は書面なり電報で推測する事は出來たが、非常の苦心でしたな、併し夫れだけの苦心をして、最う一息と云

ふ處で逮捕の出來なかつたのは僕も殘念に思ふ。だが君の腕だ。近い内に捕縛が出來るでせう、僕は君を信頼する、怎うか飽迄一生懸命でやつて下さい。』

『夫れは仰せ迄もありません、私が一身に引き受けた事件ですから、日ならず屹度逮捕して御覽に入れます。』

『怎うかさうして下さい。』

刑事は其の儘警察署を出ると、再び捜索に取り掛つた。

兇漢の巣窟であつた八重洲町や、代々木や、程ケ谷の怪しい家の附近を、毎日のやうに迂路付いて居るのは佐賀刑事である。

刑事は充分に探偵をして見たが、剛藏は是れ等の巣窟へ立廻つ

た様子がない。

『剛藏の奴、何處へ行つたのだらう……何れは此處へ來るに違ひないのだが……。』

と刑事は尙ほ、注意に注意をして居た。

或る月夜の晩の事である。佐賀刑事は八重洲町の巢窟を覗つて居ると、傍の露路から一人の男が兩腕をまくり上げて、

『ウーイ。』

酒臭い呼吸を吐いて、人が其處に居るとも心付かないで刑事の前を通り過ぎた。

其の時月明りで佐賀刑事の目に映じたのは、其の男の右腕に刻

つたハート形の文身である。

『慥に電團の奴に相違ない。』

と刑事は其の後を尾行した。

『馬鹿に好い心持になつちやつた。是れで今夜又飲めるんだから有り難へ。』

男は恁う獨言を云ひながら莞爾して、八重洲橋の停留場迄來た

『チョッ怎うしやがつたのだ。電車は是れだから嫌になる。』

暫く待つても電車が來ないので、男は恁う云つた。

聽て電車が來ると、男はまた、

『ウーイ。』

酒臭い呼吸を吐きながら乗り込んだ。

刑事も後に續いたのである。

電車に乗ると男は流石に腕捲りは下したが、コクリ〳〵と居眠りを始めた。

『貴下、貴下、何處へ行くんです。』

と車掌は男の肩を輕く叩きながら恁う云つた。

『五月蠅な、好い心持ちで眠むつて居るのに……。』

『乗り越すと不可ませんよ。切符を切りませう。』

男は十錢銀貨を出した。

『往復ですか。』

『さうよ。』

『何處……。』

『乗り換は不用ねえよ。』

男は駿河臺下で電車を降りた。刑事も續いて降りたのである。

男は駿河臺下の、とある小間物店の露路を這入つて行く、小間物店には二十五六の美人が新聞を見ながら店番をして居た。

刑事は男の後に付いて露路を這入ると、男は突當りの小さい木戸の前へ立つと周圍を見廻した。刑事の姿は男の目には映らなかつた。男は安心した躰で木戸の中へ影を隱して了つた。

『怎うも怪しい、屹度秘密があるのだ。事によると此處も電團

の巣窟かも知れない。』

恁う思ふと刑事は勇み起つた。

窃と木戸の傍へ寄つて耳を立てたが、森閑として何の物音も聞えなかつた。

折柄露路口に人の足音がした。刑事は見付けられては大變だと思つたが、あたりに身を隠す處がない、不圖化粧品でも入れたらしい大きな箱が目に付いた。刑事は其の中へ這入つて息を殺した

足音は慥に二人である。夫れに何やら話しながら來るのであつた。

『先生も今度は危ねえ處だつたぜ。』

『そうだなア、彼の佐賀ッて云ふ奴に見込まれたら往生だ。』

『だから早く彼奴を形付けて、大に活動をやるんだ。』

『淺草でか？』

『何を……。』

『活動寫眞をやるんぢやねえのか。』

『馬鹿ッ、洋服ばかり着たつて夫れだから仕樣がねえ。』

此の男は背廣を着けて居た。

『ぢや何をやるんだ。』

『活動つて云ふのは、仕事をする事だ。』

『さうか、さうならさうと早く云へば可いのに……。』

二人は木戸を這入つて行つた。

刑事は箱を飛び出すと、木戸口を合鍵で開けて忍び込んだ。

（十五）惡漢の捕縛

此處は他の巣窟に比べると、開放主義である。木戸口に錠が下してあるばかりで、中の扉は開け放しであつた。刑事は締りが緩やかであるだけ夫れだけ心を締てかゝつた。

入口を這入つて三四間曲折つて行くと、其處に階段がある。其の階段を下りると話し聲が手に取る如に聞える。刑事は右手の扉の間から中を覗いて見やうとしたが、少しの隙間もない、鍵穴迄

堅く塞いである。止むなく刑事は扉に耳を着けた。

室内には凡そ十四五人程居るらしい、酒を飲みながら頻りに話し合つて居る。

『一躰何人集つてるんだ。』

『十五人居るよ。』

『ぢや最う來る者は無えんだな。』

『さうだ、皆なで是れだけだ。』

『先生は馬鹿に遲いぢやねえか。』

『最う歸りさうなものだな。』

『何處へ行つたんだ。』

『警察へよ。』

『警察へ……何しに……。』

『捜索係長に化けて、一芝居打ちに行つたんだ。最う幕が締る時分だらうよ。』

是れを聞いた佐賀刑事は、未だ曾て無い驚き方をした。流石は剛藏だけに大膽不敵だと思ひながら、なほも耳を欹てゝ居た。

『其の芝居の筋書は、怎う云ふのだい。』

『何に、大して面倒な狂言ぢやねえ、警察の繩張りが馬鹿に嚴重で、其の上佐賀と云ふ毛虫が我々を瞰んで居やがるから、旨い活動が出來ねえぢやねえか……。』

『そら活動寫眞だ……。』

と一人が口を出した。

『何を云ひやがる。』

『默つて居ろッ。』

一時室内は騷がしかつた。夫れが靜まると、軈て又話しを續けた。

『……だから先生が得意の變裝で捜索係長に化けて署長に面會てさ、警視廳の捜査によると剛藏は北海道へ行つた形跡がある……、てな事を云ふと署長は豈夫僞者の係長とは思はねえから、夫れでは佐賀を北海道へ向けませう……と來る、從つて東京市中

の警戒が緩む、其の間に一つ大きな仕事を仕様つてんだ。』

『成る程、流石は先生だ。旨く考へたな。』

『夫れだけぢや無え、最う一つある。』

『未だあるのか……。』

『是れが大芝居だ。信州でやられた姐御や高山等が今日警視廳へ護送られて來たさうだから、京橋の方が旨く行つたら歸りに警視廳へ寄つてよ、捜索係長の監房巡視と見せ掛けて、姐御や仲間の奴等に兇器を渡して逃走させる考へで、短刀や短銃を用意して行つたんさ。』

『そいつァ大掛りだ。併し眞物の捜索係長が居たら怎うする。』

『其處は先生だ。失策を踏むやうな事はしねえよ。』

一部始終を聞いて、佐賀刑事は愈々驚いた。

『怎うしちや居られない。』

と京橋署へ驅け付けた。

署長室は電燈が光々として、署長は剛藏の化けた捜索係長を眞者と心得て、熱心に話しをして居る。

佐賀刑事は次の間へ這入つて、樣子を窺つた。成程能く化けて居る。何う見ても眞者の捜索係長としか思へない、話しを聞かなかつたら、佐賀刑事も欺されたに違ひないのである。

僞者は眞面目腐つて話して居る。

『今話した如な次第ですから、北海道の方へ全力を集注させて下さい、北海道の警察へも依頼はして置きましたがね、何しろ無類の兇賊ですからな、一日も早く逮捕せん事には何の位社會へ害毒を流すか分りませんよ、第一警察の威信に關係りますからね。總監も非常に心痛して居られるです。』

『御尤もです、京橋署からは早速佐賀刑事を差向ける事に致しませう、彼の刑事は御承知の通り敏腕家で、本事件に關しては寢食を忘れ、一身を犧牲に供して掛つて居るのですからな。』

『さうして貰ふと僕も安心です。併し署長、君も隨分疲勞されたでせう、本事件突發以來碌々安眠も出來ませんからね。』

『貴下もお疲勞でしたらう、御就職後間もなく恁麽事件が起つたのですから、御心勞はお察しいますよ。』

『早く此の事件を解決して、お互に枕を高く寢みたいものです。奴を逮捕したら大に祝杯を擧げませう。』

『さうですな。』

『ハ、ハ、、、。』

『ハ、ハ、、、。』

佐賀刑事は隣室で此の話しを聞いて腹が立つた。そしてまた可笑くもなつた。

此處で剛藏の化の皮を剝のは雜作ないが、たゞ剝いたのぢや面

白くない、

『一番剛藏をアッと云はせる如な事をしてやりたいものだ。』

と考へた。

『さうだッ。』

と佐賀刑事は微笑して此の場を立ち去つたのである。

刑事が立ち去つて間もなく、京橋署の玄關へ一輛の人俥が着いた。

『御苦勞。』

恁う云つて降りた人を見ると、警視廳の搜索係長である。

『又搜索係長が來た。』

『何時の間に、同じ人が二人出來たのだらう……。』

と署員は非常に驚いた。

係長は悠々として署長室へ這入ると入口の扉を締めて、ピンと錠を下して了つた。

一人しかない搜索係長が、また一人來たのだから、署長は眼を圓くして驚いた。剛藏も眞者が來たと思つたから、一時はハッとしたが、其處は大膽不敵の兇賊の事だ、度胸を極めて澄して居る。

『ヤア僕に其の儘の人が來て居ますなア。』

係長は恁う云つて椅子に腰を下すと、ヂッと僞係長の剛藏を瞶めて置いて署長に、

『署長、是れは何と云ふ人です。』

『是れも矢つ張り捜索係長で……。』

署長はドギマギして居る。

『警視廳に捜索係長は僕より外にない筈だ。貴様は偽者なんだらう。』

剛藏は眼を光らせて、

『何、偽者……乃公は眞個の係長だ。貴様こそ偽者だらう……。』

『默れ剛藏ッ。』

『何ッ。』

『乃公の顏を見忘れたか、佐賀だッ。』

云ひつゝ鬘や附髭を取れば、眞實の係長と思つたのは佐賀刑事であつた。

『ヤッ。』

流石の剛藏も驚いた。

『最う免れぬ處だ、早く假面を剝いて縛に就けッ。』

『恁うなれば破れかぶれだ、如何にも乃公は梶原剛藏だッ。佐賀覺悟ッ。』

隱衣より短銃を取り出すや否や、佐賀刑事を目掛けてズドンと放した。

『何をッ。』

刑事は飛鳥の如く飛び掛つて、短銃を打ち落し、暫く搭闘をして居たが、剛藏の惡運盡きて佐賀刑事の爲めに捕縛されて了つた

『署長、實に危險な場合でした。』

と刑事は云つた。

署長は僞捜索係長を暴く事の出來なかつた無能を羞ぢ、佐賀刑事の非凡な働きを賞揚した。

刑事は駿河臺下の巣窟で聞知した一部始終を物語り、

『私は是から直に巣窟に向つて、部下の一同を逮捕致します。』

と十名の應援巡査と共に駿河臺下の巣窟に向つたのである。

此の時佐賀刑事は、剛藏と寸分違はぬ變裝をして居た。

巣窟へは佐賀刑事一人で這入つた。

室内からは相變らず話し聲が聞える。醉つて寐て居る者がある

と見えて、鼾の聲も交つて居る。

刑事は合鍵で扉を開けて、

『今歸つた！。』

と室内に進んだ。

『先生お歸りなさい。』

一同は口々に恁う云つて、頭を下げた。

『大層遲かつたぢやありませんか。』

と中の頭立つたのが恁う云つた。

『うむ、少し都合があつたもんだからな。』

刑事は剛藏の假聲を使ひながら、隱衣から例の藥品を入れた小函を取り出し、

『こら一同の者能く聞け、首魁剛藏は今捕縛した。乃公は剛藏ぢやないぞ、貴樣等を逮捕に向つた佐賀刑事だッ。』

と云ふより早く小函を中央に投げ付けた。黑煙は朦々として立ち昇る。

『夫れッ。』

と一同は短銃を一二發放つ內にバタリバタリと倒れて悉く縛されて了つた。

茲に於て一時滿都の人心を寒からしめた兇賊は全滅した。同時に名探偵佐賀彥太郎の名は日本全國に鳴り渡つたのである。

探偵文庫 怪賊團 終